

# アクティブ・ラーニング型授業と読むことの対話的交流を目指す 授業との架橋

——梶井基次郎『檸檬』による学習者の解釈比較——

松 本 誠 司

## 【1】対話的交流を目指す授業へのアクティブ・ラーニング導入

文学作品を教材とする授業で、学習者に作品の解釈等を複数回記述させ、それを学習者間で交流させることで読みを深めていく方法を試みている。この授業は、教室実践の観点から学習者の対話の対象として作品の文章・他者・自己の三者を想定している。まず、学習者に個人内で作品との対話をさせるために、作品の文章の言葉と言葉との結合可能性に目を向け、そこに生じる〈空所<sup>（注1）</sup>〉を補填することと読み進める方法を採用。〈空所〉に意味を補填する推論解釈にこそ、個人内の読みの独自性が求められるからである。〈空所〉に反応して記述された個人内の読みを対話の場に引き出すのが次の段階である。ここでは学習者の記述を分類したものを読み合わせ、彼らに先行解釈に対する解釈を記述させる。この過程で読みの対話的交流をはかり、個人内の読みの改変といった現象に注目して

いく。その上で自分自身の読みを自己評価させる。これらの活動を通して、解釈は深まったのか、学習者は作品に揺さぶられたのかといったことを明らかにしていく。

さて、アクティブ・ラーニングの一般的特徴について、松下佳代はボンウェルとアイソンが定義した五つの特徴に「認知プロセスの外化」を加えて次の六つの特徴とし、「アクティブであるだけでなく、ディーブでもあるべき」ことが目指されている。<sup>（注2）</sup>

- (a) 学生は、授業を聴く以上の関わりをしていること
- (b) 情報の伝達より学生のスキルの育成に重きが置かれていること
- (c) 学生は高次の思考に関わっていること
- (d) 学生は活動に関与していること
- (e) 学生が自分自身の態度や価値観を探究することに重きが置かれていること
- (f) 認知プロセスの外化を伴うこと

その上で「ディープ・アクティブ・ラーニング」について「学生が他者と関わりながら、対象世界を深く学び、これまでの知識や経験と結びつけると同時にこれからの人生につなげていけるような学習」と定義している。

読むことの対話的交流を目指す授業での学習者による記述作業そのものはアクティブ・ラーニングの一つのかたちだと思われるが、本稿の実践においては、「ディープ・アクティブ・ラーニング」の定義を踏まえながら、授業に他者を交えた活動を有機的に組み込んでいくことを目指し、(f)の「認知プロセスの外化」のために学習者に小グループ内で討議させ、その内容を受けて個人の読みを記述させていく方法を採用した。

## 【2】梶井基次郎『檸檬』の教室実践における留意点

『檸檬』は「退廃的な青春の心象風景が鋭敏な感覚と的確な表現によって綴られている」といった表現と共に紹介される。その作中人物「私」自身の感覚や気分を読み取るという点で研究史を眺めると、作品内の「私」と作者である梶井が不可分のものとされている。教授者としては、作中人物「私」を梶井その人ではなく、作者によって造形された「私」として学習者に示唆する必要があると考える。『檸檬』は多くの断片・草稿・習作の段階を経て定稿に至った。先行する詩「秘めやかな楽しみ」(大正十一年)に続く「檸檬の歌」(題名のみ残る、大正十二年)、『檸檬』を挿話とする断片「

「瀬山の話」草稿、大正十二年)、習作「瀬山の話」(大正十三年)といった草稿・習作がある。習作「瀬山の話」の中の一挿話「檸檬」の末尾では造形された作中人物「瀬山」の自虐的な言葉が見られ、この部分が定稿『檸檬』において削除されていることが、研究史では改稿における注目点とされている。教授者が以上のような情報を提示することで、学習者は作品において造形された「私」という見方に接近できる可能性がある。

更に、習作詩篇「秘めやかな楽しみ」は「『檸檬』の本質的なモチーフがほとんどすべて、この詩のなかに刻まれている」という見方がなされ『檸檬』の原型と考えられている。この習作詩篇と定稿『檸檬』との比較作業は教室においては解釈の導入として意味を持つと考える。単純に比較しても、習作詩篇に「檸檬」爆弾の記述のないことが即座に了解されるからである。ここで筆者が教授者として学習者の初読段階で留意した点を挙げておく。

・作中人物「私」を、「私」として捉えさせること  
・読みの初期段階で「檸檬」爆弾の発想に注目させること

続いて『檸檬』で推論解釈を必要とする部分について見ておく。冒頭の「えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終抑えつけていた。」という一文がこの作品全体を規定する力を持つという見方がある。作家の福永武彦は「檸檬」の出だしの一行は、要するに彼の全作品を流れる主調低音である」と述べ、この考え方は概ね一般に受け入れられている。作品内の言葉と「不吉な塊」との関連づ

けは授業において必要な作業だと言えよう。

この作品は『檸檬』記述時の「私」が「その頃」「あの頃」の「私」を回想して語ったものである。「その頃」の「私の心」は「不吉な塊」に「抑えつけ」られ、「私」は「街を浮浪」している。同時に「私」は「みすばらしくて美しいもの」にひきつけられており、「浮浪」の過程で「私」の好んだものが列挙される。その「私」が最終的に手にするのが「檸檬」という具体物であった。「重さ」を持った、手に握ることも匂いも嗅ぐこともできるものが「檸檬」である。「私」の「憂鬱」は「紛らされ」「私」は「心」の「不可思議」さを感じる。「幸福」になった「私」には「避けていた丸善」が「やすやすと入れる」ものと思われるが、実際には「丸善」内部でもとの「憂鬱」に支配されていく。その「憂鬱」を「軽やかな興奮」と共に振り払うのが「檸檬」だった。「檸檬」は「画本」の「城」の上に据えられうまく働き、更には「丸善」を「こつぱみじん」にする「爆弾」としても機能する。

これらの「不吉な塊」から始められる言葉の連関により推論解釈を必要とする〈空所〉が明らかになってくる。「不吉な塊」と「檸檬」は共に「重さ」を持つものという点で関係してこようし、「檸檬」と出会う過程で示される「みすばらしくて美しいもの」たちと「檸檬」も繋げられてよい。なぜ「檸檬」でなければならなかったのかという理由も解釈の対象になる。その色・形・匂いへの注目と同時に「檸檬」を手に入れる過程での光と影の描写といったことへの注目も可能となる。ここで問題となるのは「不吉な塊」の意味するものや「檸檬」及びその「重さ」の内包する意味である。学習者

の読みを促す〈空所〉として次の二点を挙げておく。

〈空所1〉「えたいの知れない不吉な塊」の意味するもの  
〈空所2〉「檸檬」の意味するもの、その重さの意味するもの

さて、作品内の時間を出来事順に整理し、記述時点までも考慮しつつ、語り手の語る行為そのものに注目することが読みを広げていくことがあるが、作品内の「あの頃」という表現への注目はその一例である。この表現には現在の「檸檬」を記述している「私」が「あの頃」のことを対象化して眺める態度が何われ、正方向としての懐かしみや、負としての「私」の自己批判を読み込むこともできる。実際に「不吉な塊」からの解放について『檸檬』の解釈史を眺めてみても、京極を下る「私」を完全に解放された存在と捉えるものはなく、多くは一時的な解放・慰めと解釈している。想像の「檸檬」爆弾によって得られた仮の慰めが「私」にとって永続的なものとはならない、その一瞬性が「檸檬」を永遠の青春文学としているとも言え、この一瞬を仮構し語ることができたことに『檸檬』という作品の価値がある。

学習者に『檸檬』記述時の「私」像を意識させる（文体や記述態度を意識させる）ことで、「檸檬」爆弾という美的な発想によって「不吉な塊」からの一時的解放を試みる行動的な「私」像と、今後変わりなく「不吉な塊」に支配される負の「私」像との対照が明確化すると考える。学習者の読みを促す〈空所〉として、次の一点を加えておく。

〈空所3〉 作品内の出来事の時点から、記述時点までの「私」像

以上の留意点を意識し、授業展開を構築した。

### 【3】梶井基次郎『檸檬』の授業展開について

筆者は一九九七年度以降、文学作品を教材とする授業で学習者の記述による対話的交流を目指すことに取り組んでいる。これに該当する『檸檬』の実践は五年度分あり、それぞれ複数クラスで実践を行っている。そのうち、過去実践の基本的な授業展開を持つ二〇〇〇年度実践と、アクティブ・ラーニングの場面を意識的に組み込んだ二〇一六年度実践の授業展開を示しておく。

#### （1）二〇〇〇年度実践（高等学校三年生対象<sup>（注7）</sup>）の授業展開

- 第一時 文学史・通読・初発疑問と一次解釈記述（第1記述）
- 第二時 初発疑問読み合わせ・一次解釈を用いての読解（前半）
- 第三時 一次解釈を用いての読解（後半）
- 第四時 全体的読解・一次解釈を受けての解釈記述（第2記述）
- 第五時 第2記述の読み合わせ
- 第六時 第2記述に対する解釈記述（第3記述）
- 第七時 第3記述読み合わせと作品のメッセージのまとめ
- 第八時 読みの自己評価（記述・その場での簡単な発表）

学習者の解釈記述による対話的交流を通して、他者解釈の影響の確認や自己の内奥の読み取りといった作業を行い、学習者自身が主体的に作品と向き合うことを目的とした授業展開である。一次解釈は初発疑問に対応させて考えたことを簡潔に記させたものであり、対話的交流の中心は第2記述と第3記述となる。

教授者として留意したのは、学習者の第1記述（疑問及び一次解釈）のすべてを提示し、一次解釈の紹介を交えて作品を再読していく過程で、前述の〈空所〉としての「不吉な塊」や『檸檬』と『檸檬』爆弾の解釈という学習者の反応数の多かったものについて解釈を促すことである。また、学習者の解釈分類のために教授者が設定した解釈の分類方針についても説明を加え、学習者の解釈が得られなかった分類についても「解釈なし」として教授者が設定した枠組み（たとえば、「あの頃」という表現への注目）を提示し、第2記述の解釈を促した（分類のための解釈指標については後掲〈表1〉の解釈指標1・2を参照のこと）。対話的交流の活性化という点で、解釈のための枠組み提示は意味を持つと考えている。

#### （2）二〇一六年度実践（高等学校三年生対象<sup>（注8）</sup>）の授業展開

- 第一時 推論解釈とは何か・読みの方法・文学史説明・作品通読
- 第二時 習作詩「秘めやかな楽しみ」による物語内容の確認・グループ学習①（推論解釈の必要な疑問点について）
- 第三時 各グループによる疑問点の発表・疑問点の板書整理

#### 第四時

疑問点についての確認・グループ学習②（序盤部分から四つの時間〈幼い時・生活が蝕まれていなかった時・不吉な塊に支配されていた時・「あの頃」のこととして回想した記述時〉を発見する）・物語内容の時間順整理

#### 第五時

『檸檬』の言葉のつながりの確認・グループ学習③（不吉な塊・『檸檬』及びその重さ・その後の「私」について）・各グループによる発表・板書による整理

#### 第六時

解釈のための指標（枠組み）を示した上での第1記述

#### 第七時

第1記述の読み合わせ・第2記述（解釈に対する解釈及び読みの自己評価 ※提出課題とする）

#### 第八時

第2記述の読み合わせ・まとめ

二〇一六年度実践では、授業にアクティブ・ラーニング型の場面を組み込むことを目的とし、過去の実践を踏まえて、教授者による資料を適度に配置し、グループ学習を柱として授業を進めた。グループによる話し合いを三度行い、グループ内での「認知プロセスの外化」を目指し、更には話し合った結果をグループ代表に発表させることで教室全体のものとして引き受け、それらの解釈に基づいて個人としての解釈を記述していくという方法を採用した。他者の記述に対して個人として再解釈していく方法は従来通りである。

この授業展開は、学習者の対話的交流を目指す授業にオーソドックスなグループ学習を組み込んだに過ぎないが、学習者による記述そのものには見るべきものが多いと感じられた。

### 【4】梶井基次郎『檸檬』の授業実践における解

#### 釈の実践

（1）二〇〇〇年度実践における学習者の対話的交流

二〇〇〇年度実践では、第1記述で初発疑問と簡単な一次解釈を記させ、読解授業の後に本格的に第2記述を記させた。第2記述（総数四十）を受けての第3記述（総数三十九）で多くの支持者を得たものを取り上げて交流と解釈の実際を簡単に見ておきたい。前述の〈空所1〉と〈空所2〉に触れたもので、第3記述で十一名が支持した解釈を挙げる（解釈に分類番号を施しており、解釈指標に対応している。三つめの数字が個別番号である。なお、本稿では二〇〇〇年度実践で得られた解釈についての別表資料等は付していない。）

●第2記述〈すべてを「みすばらしくて美しいもの」にしようとしたという解釈〉（※傍線は教授者による、以下同じ）

【④・3・06】筆者はまだ病氣（不吉な塊）に悩まされていない頃、美しいもの、丸善が好きだったが、病氣になるにつれて、だんだん自分に劣等感を抱くようになり、美しいものを見ても以前のように素直になれなくなってしまう、美しい中にもみすばらしさのあるものに魅力を感じるようになった。そして、その中でも筆者を興がらせた果物店の檸檬を選んだ理由は、まず、妙に暗さを感じさせる店が筆者にとってのみすばらしくて美し

いものであったことと、檸檬に対しても同様の価値観を持っていたからだろう。そして、その檸檬が自分の不吉な魂を馳めてくれたことに幸福を感じ、この際、何もかもみすばらしくて美しいものにしてしまいたくなった。そこで美しいものの代表的存在である丸善の本屋で檸檬を置くことでみすばらしさを出そうとした。しかもそれを爆弾に見立てることで美しさを失わせようとした。でも本当は心の奥では病気を爆弾でふき飛ばしてしまいたかったんじゃないかと思う。

この解釈は「みすばらしくて美しいもの」を柱として「檸檬」と「私」と「丸善」との関係を捉えた点で、作品の読み取りの過程で確認した〈空所〉に的確に反応している。また、「私」の本心を解釈している点も見逃せない。この解釈に対して、第3記述において十一名が共感的反応を示したり、参照した上で追加解釈を記しており、影響力の強い解釈が教室の読みを牽引し、後発の解釈の起点となった。第3記述の中でテーマ的なものと広がった解釈の一編を挙げる（解釈に対する解釈の分類番号は、最初の三つの数字が対象先行解釈の分類番号の引用で、最後の数字が個別番号である）。

### ●第3記述《④・3・06》に対する解釈十一編のうちの一編》

【④・3・06・05】「私」は病気だったので、以前のように本当に美しいものを素直に感じる事が出来なかった。だから美しい中にもみすばらしさのあるものに魅力を感じるようになったのだと思います。「私」の中で檸檬は自分に近い存在であり不吉な

魂を馳めてくれた。それを使って丸善のような美しいものをこっぱみじんにすることを思いついたのは、美しさを失わせ作者独自の「美しさ」を生み出そうとしたのではないか。

この学習者は「私」独自の新たな美の創造に触れている。「丸善」を「みすばらしくて美しいもの」にする、つまり「私」の「錯覚」の意義に触れた解釈から、想像による「私」向きの世界の一瞬の創造といったテーマ的な解釈への広がりが見られた一例である。こういった解釈の参照関係が示すのは、学習者の解釈記述を用いた対話的交流によって作品解釈が深まる可能性であろう。

このように学習者の内発的なものを重視した対話的交流の方法には見るべきものがあると考ええる。注目可能な先行解釈に対して学習者は意欲的な反応を見せている。ただし、二〇〇〇年度実践では第2記述の段階で、作中人物「私」に対する印象批評も記されており、学習者全員が作品『檸檬』の〈空所〉解釈に向かったとは言いが切れない。第3記述ではほぼ全員が他者の先行解釈を参照し作品解釈に向かっているが、第2記述の段階での更なる深まりを求めたかったところである。

以上のような読むことの対話的交流を目指す授業の方法に具体的なアクティブ・ラーニングの活動を組み込んだ際に、更なる解釈の深まりが期待できるのかどうかを検証していく必要がある。

### (2) 二〇一六年度実践における学習者の対話的交流

まず、二〇一六年度実践での第五時のアクティブ・ラーニングの

場面（グループ学習）で得られた口頭発表を再現しておく。

○第五時 各グループ毎の解釈（不吉な塊・「檸檬」の重さ・その後の「私」発表のまとめ

〈不吉な塊とは何か〉

1班 心の闇 2班 疲れ 3班 さみしさ・脱力感

4班 檸檬とは異なりとらえられないもの

5班 不幸・疲れ 6班 憂鬱・かかえていた悩み

〈「檸檬」とは、「檸檬」の重さとは何か〉

1班 病をまぎらわす働き・不吉な塊とは逆のもの

2班 現実逃避

3班 いたずらする勇気をくれる魔法の果実

4班 不吉な塊とは逆のもの

5班 「私」を幸福に導くもの 6班 幸福なもの

〈今の「私」はどのような状況だろうか〉

1班 昔をふりかえる余裕ができた

2班 元気になっている 3班 依存が続いている

4班 不吉な塊におさえられることがなくなった

5班 前向きに考えられるようになった

6班 のりこえて強くなった

グループによるこの活動が個人解釈のための補助的解釈として機能していたのかを検証する必要があったが、学習者にそのことを問いかけないの把握する術がない。ただし、各グループ

の活動及び解釈発表を受けて記された第1記述では、解釈にある程度の共通性が見受けられた。「檸檬」を「不吉な塊」とであると捉えたものが九例（第1記述の総数は三十三）あり、グループ活動によって方向付けられた可能性もある。ただし、「檸檬」Ⅱ「不吉な塊」とする解釈はグループ毎の解釈発表の段階では表面化しておらず、話し合われたかどうかの確認もできていない。また、「檸檬」後の「私」について「不吉な塊」が取り除かれて元気になったという解釈は、グループ毎の解釈発表の段階で多く見られたが、第1記述においても十二例見られ、相関関係が予想されると共に、学習者が大団円的な物語内容の帰結を欲していることが想像される。更に、第1記述で「檸檬」爆弾による瞬間的な解放に触れたものが十二例あり、その後も「不吉な塊」が消えることのない「私」の闇の部分について触れたものは三例しかなく、ここでも大団円的帰結に期待する様子が見て取れる。ちなみに、第2記述（総数三十三）でも「不吉な塊」が残り続けるとした解釈は四例のみであった。

なお、学習者の第1記述の分類については、後掲の〈表2〉で示している。〈表2〉は解釈指標による分類順になっており、第1記述の内容の簡単な要約と共に「爆弾」によって解放された「私」像への言及、「檸檬」経験後の「私」の状況への言及についても○印で示した。また、後掲の〈表3〉は第1記述を対象として記された第2記述を分類順にまとめたものであり、先行する第1記述に対してどのように第2記述が行われたのがわかるようになってい

る。さて、第1記述の読み合わせにおいて目立っていたのは「檸檬」を「不吉な塊」とした九例の解釈（解釈番号〔4・1・06〕

【④・1・07】【④・2・04】【④・2・05】【④・4・04】【④・4・05】【④・4・07】【④・4・08】【⑤・2・04】である。述べたが、授業ではこれらの解釈と「檸檬」を良いものそのまま捉える解釈とを対立させて焦点化することができた。また、「檸檬」を「不吉な塊」とした解釈には、「不吉な塊」を捨て去り、今後の「私」が「不吉な塊」から解放されるというものの（④・1・07）【④・2・05】【④・4・05】が含まれており、また、「檸檬」を「不吉な塊」としながらも、記述時点の今も「不吉な塊」にとらわれていると解釈したもの（⑤・2・04）も一編あった。教授者としては、第1記述の読み合わせを受けて、檸檬はプラスのもののか、マイナスのものかということを教室に問いかねばよかった。第1記述の解釈全体に漂う「私」の解放という希望について、なぜそのように読みたいのかを付け加えて問い、第2記述に向かわせた。

第2記述において最も多くの支持者を得たのは第1記述【④・1・07】の解釈であった。この解釈は、まず「檸檬」を「私」とは対照的な中身と重さのあるものと捉え、「不吉な塊」を吸収した後「不吉な塊」となり爆弾として働くという解釈である。「私」の「不吉な塊」が完全に取り除かれたようにも読めるものである。

●第1記述《「檸檬」を不安や悩みが凝縮された形で実体化した不吉な塊と捉えた解釈》

【④・1・07】檸檬を手にする前の私の生活はというと、金もなくみすばらしくて美しいものに心惹かれるようになり、友達の家

から友達の家へと転々と下宿しているようなとても満足できるものではなかった。何をするというあてもなく、街をさまよい続ける私は、孤独で寂しく、空っぽの生活をしていただと思う。しかし、そんな中出会ったのがあの檸檬である。何もなかった空っぽの私の手で感じられた檸檬は中身があつて、重さがあり、私とはまるで対照的なものであった。また、この重みは私を抑えつけていたえたいの知れない不吉な塊の重さと同じくらいで、目では見ることのできない不安や悩みがきつと檸檬の中に凝縮されたように私は感じたのではないかと思う。目には見えなかったものが、突然実体化されることによって、私の心は晴れわたり、先ほどまでの不吉な塊は嘘のように消えていったであろう。／檸檬を手にした後、手の中にあるのは不吉な塊そのものであり、これを持って帰る訳にはいかない。私にとつて、いつ爆発するのか分からない不吉な塊は爆弾として、積み上げた画集の上に据えつけ、丸善の中に置いて行かざるをえなかったのではないだろうか。そうすることにより、私を抑えつけていた不吉な塊は消えてなくなったのである。

ここでは「檸檬」についてのプラスの印象が記され、そんな「檸檬」を手放すのだから論理的な理由付けが必要だという発想がある。この解釈に対して十二名の学習者が第2記述を記した（④・1・07）の学習者自身を含む。（表3）参照のこと。更に、第1記述で同様の解釈を記していた学習者が、引き続き「檸檬」＝「不吉な塊」としたものは五例見られ、記述対象を【④・1・07】と明記

していないものの、新たに「檸檬」を「不吉な塊」だとしたものは四例見られた。これらのほぼ全ての解釈が「檸檬」Ⅱ「不吉な塊」説を支持しており、教室の読みを方向付けたが、注目すべきは【④・1・07】への疑問を示した【④・1・07・11】の解釈である。

●第2記述《「檸檬」はさわやかなものなのか、不吉なものなのかという疑問提示》

【④・1・07・11】 みんなの解釈を読んで考えが少し変わりました。檸檬は私にとって何か力を与える不思議なもので、私にいきいきとさせてくれるというプラスで明るいイメージをもっていました。しかし、檸檬は不吉な塊そのものだということを聞いてそういう考えもできると思いました。そう考えると檸檬はさわやかなものなのか、不吉なものなのかどっちが正解かと言われると正直分かりません。／自分と同じような解釈の人であれば、違う考えをもっている人もいて、檸檬はいろいろな考え方ができるおもしろい作品だと思いました。

この【④・1・07・11】と似通った疑問になっているものが一例あり（②・1・04・01）、同様に「檸檬」をポジティブなものとして捉えていた自説を変更したくないことについて、自己解釈を対象として補足的に記述したものが三例あった（④・2・01・01）【④・2・03・01】【⑤・2・01・01】。そのうちの【④・2・01・01】を挙げる。

●第2記述《さまざまな解釈を受けての自己解釈の確認》

【④・2・01・01】 皆の文を読むと不吉な塊と檸檬は対照的であると書いている人が多く、（中略）檸檬に不吉な塊を吸収させてイコールにするようなこと、檸檬は変化、新しいことであるといったような解釈がありました。私は読んでいてそれらすべてが檸檬の役割で、そのさまざまな役割が作者のいう檸檬の「重さ」ではないかと思いました。作者にとつての檸檬というのは重さを感じるので重要なものであったのだと思いました。／また自己評価について、違った見方もあったけど、私は檸檬はプラスになるよいものだと思います。

この記述は【④・1・07】にも言及した上で、「檸檬」のプラスの効果を見つめた自己解釈は変わらなかったとしている。これらの解釈の確認を通して「檸檬」の授業は深まっていた。また、学習者が記した読みの自己評価には更なる解釈への欲求めいたものが多数記されており、今後の読みの授業に繋がっていくことが期待される。

## 【5】アクティブ・ラーニング型授業についての考察

二〇一六年度実践は、対話的交流の授業に認知プロセスの外化の段階をグループ学習の形で組み込み、アクティブ・ラーニング型授業としての深まりも見られたように思う。今後も対話的交流の授業

に取り入れながら、その効果を検証していきたい。

二〇〇〇年度実践との違いは、後掲の〈表1〉で示しているように、学習者による最初の解釈記述（二〇〇〇年度の第2記述、二〇一六年度の第1記述に当たる）での印象批評的な記述の減少である。二〇〇〇年度実践では学習者の印象批評を【①・1】の【「私」についての解釈】の部分に分類していた。【①・1】には本来「私」の解釈についての深みのあるものを置くべきだが、学習者全員の記述を分類する関係上、単なる感想も解釈としてここに分類したのである。〈表1〉の【①・1】で数字を示しているが、二〇〇〇年度実践の4名に対して二〇一六年度実践は1名であり、これはグループ学習の時間を通過したことで、個々の学習者に解釈に向けた準備が整っていたことを示す可能性がある。また、【⑤・2】の【作品のメッセージに関する解釈】も、二〇一六年度実践の方が圧倒的に多い。グループ活動によって解釈に真摯に取り組む姿勢が十分につくられる可能性について、実践を重ねていく上で注目していきたい。

今回の実践でのその他の気付きを記しておく。それはアクティブ・ラーニング（ここではグループ学習）の場が学習者の持つ論理性をより強く引き出してしまったのではないか、ということである。今回の『檸檬』実践においては、第1記述の解釈の方向性が、論理的なもの、他者に説明しやすいものに偏っていたように感じられた。もちろん、作品の読みのために〈空所〉を設定し、その示唆も含めてグループで話し合わせたゆえの、論理性への帰結であることを考慮しなければならないが、論理性がグループ内の他者との解

釈共有のための拠り所になっていた可能性もある。日頃の評論教材を用いた授業では論理性を技術的に読み取ることが中心に置かれる。また、試験もこの形式で問われている。すべてのアクティブ・ラーニングの作業が論理に傾くとは思えないが、論理的なものの見方が文学作品の読みに影響する可能性について検証されてもよいだろう。

今回の『檸檬』の実践のように、学習者の読みが論理的な読みに傾いていると感じられ、感性的な読みの部分が減退していると感じられた時、教授者は文学作品の読みの愉しみについて学習者に示唆する機会を得たのだとも捉えられる。この瞬間が論理的な価値観を超えた作品のメッセージそのものの、文学作品としての味わいのようなものと学習者を接近させる大切な時になるかもしれない。文学作品の読みは論理性だけに収まるものではない。テーマ的なものと接近させるためには、学習者の感性的な部分を刺激する段階が必要であろう。本文・原文に立ち返り、作中人物による論理を超えるような行為や、語り手による感性的な批評等に再び注目させることが大切であり、作品の語り手がそのように記すしかなかったような部分を発見させる必要もあるだろう。この意味においても、学習者による論理的な解釈と感性的な解釈とを対置し、比較対照させるようなアクティブ・ラーニングの場の設定には意味を見いだせる。今後、学習者が他者による異なった解釈や誤読の価値をも認めながら、さまざまな解釈を利用して自己の解釈を構築していけるような読みの対話的交流の場をつくっていきたい。

注

(注1) イーザー、ヴォルフガング『行為としての読書 美的作用の理論』(原著一九七六年、轡田收訳)一九八二年三月、岩波書店。

(注2) 松下佳代他編著『ディープ・アクティブ・ラーニング―大学授業を深化させるために―』二〇一五年一月、勁草書房、「序章」。

(注3) 飛高隆夫「檸檬」『国文学』一九八七年七月増刊号、學燈社、一四六頁。

(注4) 三好行雄「檸檬―現代文学鑑賞」『解釈と鑑賞』一九六三年十一月、至文堂、一一六頁。

(注5) 『檸檬』本文は二〇一六年度『現代文〔新訂版〕』(東京書籍)に拠る。

(注6) 福永武彦『意中の文士たち上』一九七三年六月、人文書院。

(注7) 広島市立基町高等学校での実践。『基町高等学校研究紀要』に発表済み。

(注8) 広島市立沼田高等学校での実践。  
(広島市立沼田高等学校)

〈表1〉実践年度別の解釈指標に対する記述の分類数

分類番号	解釈指標1	解釈指標2	2000年度 第2記述数 ※	2000年度 第3記述数	2016年度 第1記述数 ※	2016年度 第2記述数
①-1	①「人物」に関する解釈	1「私」についての解釈	4	2	1	
②-1	②「状況」に関する解釈	1「不吉な境」についての解釈	6	1	4	4
②-2	②「状況」に関する解釈	2「私」の状態についての解釈	3	4	1	1
②-3	②「状況」に関する解釈	3「私」の「錯覚」についての解釈	1			
③-1	③「出来事・事件」に関する解釈	1「私」の過去についての解釈				
③-2	③「出来事・事件」に関する解釈	2 細部描写についての解釈				
③-3	③「出来事・事件」に関する解釈	3「丸書」を纏いになったことについての解釈(2000年度のみの設定)	3	3		
④-1	④「展開」に関する解釈	1「私」にとつての「檸檬」についての解釈	8	6	7	14
④-2	④「展開」に関する解釈	2「檸檬」の重さについての解釈	3	2	5	5
④-3	④「展開」に関する解釈	3「檸檬」を本に据えることについての解釈				
④-4	④「展開」に関する解釈	4「檸檬」爆弾の発想についての解釈	10	18	8	3
④-5	④「展開」に関する解釈	5「私」のその後についての解釈(2000年度のみの設定)	1	1		
⑤-1	⑤「文体」に関する解釈	1「あの頃」という表現に注目した解釈			1	
⑤-2	⑤「文体」に関する解釈	2 作品のメッセージに関する解釈		2	6	6

※ 2000年度実践の第2記述と2016年度実践の第1記述とが、同じ授業段階の記述として対応するものである。

〈表2〉2016年度実践における第1記述(解釈指標による分類順)

分類番号	解釈指標1	解釈指標2	第1記述の内容(要約)	一瞬の解放 に触れる	後の不安 に触れる	後の不安定 に触れる	個人番号	班
①-1-01	①「人物」に関する解釈	1「私」についての解釈	画家的気質				201613	5
②-1-01	②「状況」に関する解釈	1「不吉な境」についての解釈	老化や死への恐れである			○	201634	1
②-1-02	②「状況」に関する解釈	1「不吉な境」についての解釈	檸檬の対象物である	○			201608	5
②-1-03	②「状況」に関する解釈	1「不吉な境」についての解釈	悩みである				201615	2
②-1-04	②「状況」に関する解釈	1「不吉な境」についての解釈	見ることのできない心の闇や自分の中の葛藤		○		201635	3
②-1-05	②「状況」に関する解釈	2「私」の状態についての解釈	常に変化してゆくころ	○			201617	2
④-1-01	④「展開」に関する解釈	1「私」にとつての「檸檬」についての解釈	生きている実感を与える具体的なもの	○			201614	4
④-1-02	④「展開」に関する解釈	1「私」にとつての「檸檬」についての解釈	他の美しいものよりも大切なものである	○			201627	6
④-1-03	④「展開」に関する解釈	1「私」にとつての「檸檬」についての解釈	「私」に力を与えるもの	○			201631	2
④-1-04	④「展開」に関する解釈	1「私」にとつての「檸檬」についての解釈	精一杯のぜいたくである				201624	6
④-1-05	④「展開」に関する解釈	1「私」にとつての「檸檬」についての解釈	「私」の好奇心を刺激するもの	○			201620	1
④-1-06	④「展開」に関する解釈	1「私」にとつての「檸檬」についての解釈	幸福へ導くものであり、不吉な境を表すもの	○			201610	5
④-1-07	④「展開」に関する解釈	1「私」にとつての「檸檬」についての解釈	不安や悩みが凝縮されて実体化した不吉な境		○		201603	3
④-2-01	④「展開」に関する解釈	2「檸檬」の重さについての解釈	重さとは変化や新しいことである	○			201619	2
④-2-02	④「展開」に関する解釈	2「檸檬」の重さについての解釈	不吉な境と同じくらい重い、逆の意味を持つ幸福につながるもの	○			201611	3
④-2-03	④「展開」に関する解釈	2「檸檬」の重さについての解釈	生きる目的のない「私」とは対照的な重さを持つ	○			201622	3
④-2-04	④「展開」に関する解釈	2「檸檬」の重さについての解釈	心の間の深さを埋める重さ				201601	1
④-2-05	④「展開」に関する解釈	2「檸檬」の重さについての解釈	不吉な境の重さである		○		201609	4
④-4-01	④「展開」に関する解釈	4「檸檬」爆弾の発想についての解釈	幸せの重さを持つ檸檬により不吉な境を消す	○			201602	5
④-4-02	④「展開」に関する解釈	4「檸檬」爆弾の発想についての解釈	過去の嫌いなものや自分を消し前進したかった		○		201632	3
④-4-03	④「展開」に関する解釈	4「檸檬」爆弾の発想についての解釈	嫌なものをふきとばしたい		○		201633	4
④-4-04	④「展開」に関する解釈	4「檸檬」爆弾の発想についての解釈	檸檬に不吉な境がたまって爆発する程の量になった				201605	2
④-4-05	④「展開」に関する解釈	4「檸檬」爆弾の発想についての解釈	不吉な境を吸収してくれた檸檬を爆発させる		○		201625	4
④-4-06	④「展開」に関する解釈	4「檸檬」爆弾の発想についての解釈	不吉な境を持つ「私」自身を爆発させる	○			201616	6
④-4-07	④「展開」に関する解釈	4「檸檬」爆弾の発想についての解釈	不吉な境としての檸檬を爆発させる				201604	5
④-4-08	④「展開」に関する解釈	4「檸檬」爆弾の発想についての解釈	不吉な境としての檸檬を爆発させる	○			201607	1
⑤-1-01	⑤「文体」に関する解釈	1「あの頃」という表現に注目した解釈	「あの頃」は過去の思い出もつながっている		○		201621	4
⑤-2-01	⑤「文体」に関する解釈	2 作品のメッセージに関する解釈	新しい気持ちで生きようとする自身へのエール		○		201618	6
⑤-2-02	⑤「文体」に関する解釈	2 作品のメッセージに関する解釈	一般的な価値観でなく、自分の変化を肯定する		○		201628	1
⑤-2-03	⑤「文体」に関する解釈	2 作品のメッセージに関する解釈	視点を変えることで感情の支配から逃れられる		○		201606	2
⑤-2-04	⑤「文体」に関する解釈	2 作品のメッセージに関する解釈	檸檬は不吉な境であり、過去への憧れが闇となりその思いは今もある			○	201612	4
⑤-2-05	⑤「文体」に関する解釈	2 作品のメッセージに関する解釈	青年期の不安や反抗心を表す・俗世間から離れて生きること			○	201626	3
⑤-2-06	⑤「文体」に関する解釈	2 作品のメッセージに関する解釈	心の変化の不思議さを伝える		○		201623	1

〈表3〉2016年度実践における第1記述に対する第2記述(解釈指標による分類順)

対象第1 記述番号	解釈指標1	解釈指標2	第1記述の内容(要約)	個人番号	第2記述 番号	第2記述の内容(要約)	反応の かたち	解釈の 対象※
②・1-01	②「状況」に関する 解釈	1「不吉な境」について の解釈	老化や死への恐れである	201633	②・1-01-01	不吉な境についての多様な解釈への 印象	印象	
②・1-02	②「状況」に関する 解釈	1「不吉な境」について の解釈	樗櫟の対象物である	201608	②・1-02-01	樗櫟のプラスイメージによる自己解釈 の精緻化	精緻化	對自己
				201605	②・1-02-02	樗櫟が幸福を表すことについての疑 問	疑問	
②・1-04	②「状況」に関する 解釈	1「不吉な境」について の解釈	見ることでできない心の間や自 分の中の葛藤	201635	②・1-04-01	他の解釈と比較しての自己解釈の見 直し	反省	對自己
②・2-01	②「状況」に関する 解釈	2「私」の状態について の解釈	常に変化してゆくこころ	201617	②・2-01-01	樗櫟を惜しまず手放すマイペースさ という解釈の追加	補足	對自己
④・1-01	④「展開」に関する 解釈	1「私」にとっての「樗 櫟」についての解釈	生きていく実感を与える具体的 なもの	201614	④・1-01-01	樗櫟を良いものとした自己解釈への 補足	補足	對自己
				201601	④・1-01-02	マイナスイメージを治す樗櫟という解 釈の自己解釈への追加	補足	(自己)
④・1-07	④「展開」に関する 解釈	1「私」にとっての「樗 櫟」についての解釈	不安や悩みが凝縮された形で実 体化した不吉な境	201603	④・1-07-01	樗櫟が不吉な境であるという解釈へ の補足	補足	對自己
				201615	④・1-07-02	樗櫟が不吉な境であるという解釈へ の共感(付①・1-01も)	共感	
				201606	④・1-07-03	樗櫟が不吉な境であるという解釈へ の共感	共感	
				201624	④・1-07-04	樗櫟が不吉な境であるという解釈へ の共感	共感	
				201632	④・1-07-05	樗櫟が不吉な境であるという解釈へ の共感	共感	
				201613	④・1-07-06	樗櫟が不吉な境であるという解釈へ の共感	共感	
				201620	④・1-07-07	「樗櫟＝不吉な境を持って帰る訳に はいかない」という解釈への共感	共感	
				201602	④・1-07-08	樗櫟が不吉な境であることの、自己 解釈への追加	補足	(自己)
				201611	④・1-07-09	樗櫟が不吉な境であることの、自己 解釈への追加	補足	(自己)
				201634	④・1-07-10	樗櫟が悪であるという解釈の自己解 釈への追加	補足	(自己)
				201631	④・1-07-11	樗櫟はさわやかなものなのか、不吉 なものなのかという疑問提示	疑問	
				201604	④・1-07-12	樗櫟が不吉な境であるという解釈と 自己解釈の相違点	補足	(自己)
④・2-01	④「展開」に関する 解釈	2「樗櫟」の重さにつ いての解釈	重さとは変化や新しいことである	201619	④・2-01-01	さまざまな解釈を受けての自己解釈 の確認	補足	對自己
④・2-03	④「展開」に関する 解釈	2「樗櫟」の重さにつ いての解釈	生きる目的のない「私」とは対照 的な重さを持つもの	201622	④・2-03-01	他の解釈を読んだ上で、樗櫟をプ ラスとする自己解釈の確認	補足	對自己
④・2-04	④「展開」に関する 解釈	2「樗櫟」の重さにつ いての解釈	心の間の深さを埋める重さ	201623	④・2-04-01	心の間の深さを埋めるという解釈へ の共感	共感	
④・2-05	④「展開」に関する 解釈	2「樗櫟」の重さにつ いての解釈	不吉な境の重さである	201609	④・2-05-01	樗櫟が解放のために必要なものだ ったという解釈の追加	補足	(自己)
				201627	④・2-05-02	樗櫟に不吉な境をつめこむという解 釈への共感	共感	
④・4-01	④「展開」に関する 解釈	4「樗櫟」爆弾の発想 についての解釈	幸せの重さを持つ樗櫟によって 不吉な境を消し去る	201616	④・4-01-01	樗櫟の大きさについての解釈への賞 賛	賞賛	
				201625	④・4-01-02	樗櫟の大きさについての解釈への賞 賛	賞賛	
④・4-05	④「展開」に関する 解釈	4「樗櫟」爆弾の発想 についての解釈	不吉な境を吸収してくれた樗櫟を 爆発させる	201610	④・4-05-01	樗櫟が不吉な境を吸収することの自 己解釈への追加	補足	(自己)
⑤・2-01	⑤「文体」に関する 解釈	2 作品のメッセージに 関する解釈	新しい気持ちで生きたいとする自 身へのエール	201618	⑤・2-01-01	ポジティブにとらえるという自己解釈 の確認	補足	(自己)
⑤・2-02	⑤「文体」に関する 解釈	2 作品のメッセージに 関する解釈	一般的価値観でなく、自分の変化 を肯定する	201628	⑤・2-02-01	自己解釈に足らなかったものの確認	補足	(自己)
				201626	⑤・2-02-02	自分がいいと思うものを見つけて変 わるという解釈への賞賛	賞賛	
⑤・2-04	⑤「文体」に関する 解釈	2 作品のメッセージに 関する解釈	樗櫟は不吉な境で、過去への憧 れが闇となりそれは今もある	201612	⑤・2-04-01	樗櫟の明るさを加えた上で闇という 自己解釈の確認	精緻化	對自己
				201621	⑤・2-04-02	作品内で不吉な境を壊して楽しむ作 者という解釈への共感	共感	
				201607	⑤・2-04-03	作品内で不吉な境を壊して楽しむ作 者という解釈への共感	共感	

※ 解釈の対象を自己解釈に設定し自分の考えを深めようとしたものを「對自己」、他者の解釈を対象としながら自己解釈に言及したものを「(自己)」としている。